

ガバナンス研究部会（第226回）議事録

日時：平成28年11月18日（金）15:00～17:00

場所：学士会館310号会議室

出席者：今井、板垣、井上、上原、大関、勝田、嶋多、中嶋、永井（郁）、林、日向、山本、山脇

【定例研究発表】

1 「現代企業人の基層的規範意識と仏教―（1）原始（初期）仏教」（嶋多明夫部会員）

<概要説明>

- 国際的に日本企業の製品・サービスの質が高いと評価されるのはなぜか？それは日本人の規範意識が高いからであり、その源泉の一つに仏教に由来する徳目もあるのではないかと問題意識をもって、今回原始仏教について調べた。
- 釈尊とその弟子たちの言行を記す原始仏教は比較的わかりやすい教えであるが、それらを比較的正確に伝える阿含経典（群）がその後あまり顧みられず、日本でもほとんど伝えられなかった。倫理の観点からは、原始仏教では人間について性悪説の立場をとる。そしてどこまでも善を追求し、悪を避けることを求める。正しく生きるということが、仏教の本来めざすところであった。
- 釈尊が発見した真理の核心は、苦である輪廻的な生存を引き起こす究極の原因は根本的な生存欲であり、それを滅ぼすものは智慧であり、そのためには、輪廻的な生存にまつわるあらゆる経験的な事実が構成している因果関係の鎖を徹底的に観察、考察しなければならないとした。
- 原始仏教において見られる、現代企業人の規範意識にも共通すると思われる徳目としては、瞑想と内省、こころの平安、法、清浄観、無常観、苦、輪廻転生、功德、中道、八正道、五戒、慈悲心、平等、非排他性、寛容、和、良心などがある。
- また、「愚者に親しまない、賢者に親しむ、尊敬すべき人々を尊敬する、功德を積む、深い学識、技術、身をつつしむ、みごとなことば、父母につかえる、妻子を愛し護る、仕事に秩序あり混乱せぬ、施与と理法にかなった行ない、悪をやめ悪を離れ、飲酒をつつしみ、尊敬と謙遜と満足と感謝と、耐え忍ぶこと、修養と清らかな行ない」という徳目もあり、また雇用主と使用人との間での倫理については、「①その能力に応じて仕事をあてがう、②食物と給料とを給与する、③病時に看病する、④珍味の食物を分かち与える、⑤適当なときに休息させる。」なども挙げられている。
- 原始仏教が、人が生きて行くあらゆる局面に関して極めて広範囲に人倫の道を説いているのは、真に驚きである。そしてそこで説かれた規範の多くが、今日の我々にとっても極めてなじみ深いものであり、状況証拠的ではあるが、我々の規範意識の基層に原始仏教の極めて大きな影響があると言って間違いはないであろう。

<討議・意見>

- 日本人の精神の奥には仏教よりも神道のほうが身近ではないか。日本人は正月になれば神社に参るし、学校や企業でも神殿や神棚を飾ったりするところもある。そういうところは精神的にしっかりしているのではないか。もう一度神道を見直すべきだ。

- 今回の発表内容はマックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を彷彿させる。宗教概念が経済の発展に寄与するというアプローチだ。
- 原始仏教の教えが今の企業文化や基本的価値観に影響を及ぼしているという視点はとても良いが、それがうまく繋がっていない。打ち捨てられた原始仏教の精神がどうして現在まで続いているのかについて解明してほしい。
- これまで武士道や聖徳太子の思想について発表してきたが、そろそろ自分なりの思想や結論を入れてまとめに入ってはどうか？拡散より絞り込みを図ることが大切。

2 「新 COSO におけるフレームワークと適用方法」(大関 誠部会員)

<概要説明>

- COSOレポートによる内部統制のフレームワークの最新版は2013年に公表され、1992年の初版以来4回の改定を経ている。従来の統制環境、リスク評価、統制活動、情報と伝達、モニタリング活動の柱に合計17の「原則」、87の「着眼点」、90の「適用方法」、141の「適用事例」を示して、より理解しやすいものにしようとしている。
 - 改定最新版(新COSO)の特徴は以下の通りである。1)統制目的は、業務・報告・遵守の三つの範疇に分けられ、報告は財務報告にとどまらず非財務報告まで拡大されている。2)内部統制の構成要素の定義に「原則主義」を採用している。3)内部統制の上位概念としてERMを置き、更にそれらを包括する上位概念としてガバナンスを想定している。4)独立的評価を担うモニタリング活動で、内部監査の重要性を強調している。5)不正防止への対応を強化している。6)グローバル化の進展への対応を拡充している。
- これらの特徴で、特に注目すべき点は、フレームワークの定義に「原則主義」を用いていることである。

<討議・意見>

- 統制環境において「倫理観」と訳される言葉があるが誤訳だと思う。原文では ethical values であり、「倫理的価値観」と訳すべき。また、「アサーション」という言葉も出されているが、これも日本人には理解しにくい概念だ。敢えて訳すなら「真実性の担保」とでもなるか。十分消化しないまま日本に紹介されているのが問題。
- 新COSOには、いま世界的に問題となっている格差拡大の問題を意識しているのだろうか？また、日本の企業において新COSOは順守すべき規範となっているのだろうか？
- もともとCOSOはエンロン、ワールドコム事件など不正会計事件を反省して、会計士サイドの問題意識から生まれてきたもので、主たる眼目は正当な会計処理を確保するためのもの。いわゆる経営倫理や環境、労働倫理などとは直接関係がないのではなかろうか。1992年の初版COSOがユニークな概念設定ではあるものの分かりにくいところがあり、それを今回の改正でより分かり易くしたということだと思う。
- 分かり易くなった反面、分かりにくくなった部分もある。原則主義だから必ず守るべき規定ではないが、これらを全部やらないと内部統制が十分でないと言われるのではないかというおそれもある。

【次回開催日】12月16日(金)午後3時 学士会館310号会議室